

映像上映コーナー タイムテーブル

10:15-10:30

『七代目松本幸四郎、ルース・セント・デニス、テッド・ショーン、デニシオン舞踊団交流記録』 0:13:10

1926年、帝国劇場屋上で、7代目松本幸四郎がルース・セント・デニスとテッド・ショーンが率いるデニシオン舞踊団に「紅葉狩り」などの振付を指導している様子が記録されている。著作権を所有するジェイコブズ・ピロー・ダンスフェスティバル・アーカイブの厚意により、当館にデジタル化された映像が寄贈された。発見の経緯や撮影の背景については本展図録(11月刊行予定)を参照されたい。
撮影年：1926年

10:30-11:00

田中泯『詩の力 書のカ そして カラダ』 0:25:00

昭和20年3月10日の東京大空襲の日に母を亡くした宗左近による詩『燃える母』。勤務先の学校で凄惨な体験を書として残した書家・井上有一の『噫横川国民学校』。奇しくも東京大空襲の日に生を受けた田中泯が、この二人の作品を「カラダ」で表現する。

『詩の力 書のカ そして カラダ』

「燃える母」 詩：宗左近／朗読：田中泯

「噫横川国民学校」 書：井上有一／踊り：田中泯

制作年：2012年

監督：岩井主税

協力：石原志保、木幡和枝、宗香、UNAC TOKYO、Live Space plan-B、群馬県立近代美術館、市川市文学プラザ

資料提供：岩井主税

11:00-11:30

田中泯『Field』 0:26:35

田中泯と弟子の石原志保（石原淋）による踊りが収められた8mmフィルム作品。田中と石原の身体に肉薄した映像は、舞台では捉えることが難しい眼の動きや表情、手先や足先などの動きのディテールを見ることができる。

制作年：2009年

監督：シャビエル・イリオンド

資料提供：Madada Inc.

11:30-12:45

ボリス・シャルマツ『子供』 1:10:09

シャルマツがアソシエイト・アーティストを務めた2011年のアヴィニオン演劇祭にて、メイン会場の教皇庁中庭で行われた初演記録映像。6歳から12歳の26人の子供のダンサーと9人の成人ダンサーが出演している。大人のダンサーの動きとの対比のもと、子供たちの動きのユニークさが鮮明に現れる。

上演年・場所：2011年 パリ市立劇場

振付：ボリス・シャルマツ

制作：フランス国立レンヌ＝ブルターニュ振付センター

制作協力：アヴィニオン演劇祭、パリ市立劇場、フェスティバル・ドートンヌ、ハンブルグ国際サマーフェスティバル、シーメンス財団、ブルターニュ国立劇場（レンヌ）、ラ・パティ・フェスティバル、クンステン・フェスティバル・デザール（ブリュッセル）

資料提供：フランス国立レンヌ＝ブルターニュ振付センター

12:45-13:45

室伏鴻『Quick Silver』 0:55:10

2006年ヴェネツィア・ビエンナーレで高評を得た室伏鴻のソロ作品。本映像は2005年に開かれた「大野一雄フェスティバル」時の記録映像。銀色に塗られたうごめく身体は性差を越え、生物と物質の間を揺れ動いているかのようである。

「はかない、瞬時の変成 脆い、もっとも微弱の点滅 それが quick silver だ」（室伏鴻）。

上演年・場所：2005年 BankART Studio NYK

演出・振付・出演：室伏鴻

資料提供：Ko & Edge.Co

14:00-15:30

さいたまゴールド・シアター『KOMA』 1:23:44

彩の国さいたま芸術劇場芸術監督の蜷川幸雄が率いる平均年齢 75 歳（上演時）の演劇集団「さいたまゴールド・シアター」とピナ・バウシュ(1940-2009)率いるヴッパタル舞踊団のダンサーである瀬山亜津咲との共同作業の集大成として発表。言葉で問いかけることで、踊り手の動きや反応を引き出すバウシュの「タンツテアター（ダンス演劇）」の手法を応用している。

上演年・場所：2014 年 彩の国さいたま芸術劇場 小ホール

演出・振付：瀬山亜津咲（ピナ・バウシュ ヴッパタル舞踊団 ダンサー）

出演：さいたまゴールド・シアター

主催・企画・製作：公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団

資料提供：公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団

15:30-16:45

ELEVENPLAY ダンスインスタレーション『MOSAIC Ver.1.5』 1:09:37

タイトルの「MOSAIC」は、「Mad（気が狂った）」「Odd（奇妙な）」「Sensual（官能的な）」「Another（もうひとつの）」「Immune（影響を受けない）」「Cell（個室）」の頭文字を組み合わせた言葉。病院や実験室を思わせるセットの中で、看護婦に扮した女性ダンサーたちが、女性の心理をリアルに描き出す。ライゾマティクスによる最先端のテクノロジーを取り入れた演出は、ダンスとテクノロジーの新しい関係を示している。

上演年・場所：2015 年 スパイラルホール（東京）

演出・構成・振付：MIKIKO(ELEVENPLAY)

出演：AYA KOHMEN, ERISA WAKISAKA, KAORI YASUKAWA, YUKA NUMATA, NOZOMI HIRAMOTO, SAYA SHINOHARA, MAYUMI NIWA, MINAKO MARUYAMA

照明デザイン：藤本隆行 (KINSEI R&D)

テクニカルサポート&インタラクティブデザイン：真鍋大度, 石橋素, 比嘉了 (Rhizomatiks)

音楽：evala, Ametsub, コトリング, Jimanica

映像：TAKCOM, 堀井哲史 (Rhizomatiks), 三輪映 (McRAY CG)

エンドロール：関和亮, yukimayuko

言葉：西加奈子

資料提供：ELEVENPLAY

17:00-18:20（火曜、金曜のみ）

ジェローム・ベル『ザ・ショー・マスト・ゴー・オン』 1:19:20

2001 年にパリで初演された本作は、上演する都市毎にキャストを公募し、世界 50 都市以上で公演を重ねている。11 年には日本人キャストが中心の日本版が創作され、16 歳から 67 歳までの、俳優、主婦、学生など、様々な職業をもつ 26 人が出演した。ビートルズの「Come Together」、クイーンの「The Show Must Go On」など、世界的にヒットしたポップソングが流れる間、そのタイトルを行為として実行する。必ずしも巧みではないダンスは、ユーモラスで観客たちに親しみや一体感を呼び起こし、どれひとつとして同じではない身体の多様性を浮き立たせている。

上演年・場所：2011 年 彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

構成・演出：ジェローム・ベル

演出助手：エド・ディク・ディナ、ネヴェス・エンリック

主催・企画・制作：公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団、フェスティバル/トーキョー実行委員会

資料提供：公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団

※プログラムは予告なく変更する場合があります。